

小説部門：講評

審査委員：小説家 里見蘭

最初にお断りしておく。

今回の応募作は全体として非常にレベルが高く、外部審査委員である筆者が、これは入選作にふさわしいだろうと思った作品が一作ならず選外となった。残念ながら入選できなかった応募者も気落ちしないしてほしい。

超然文学賞の選考は、すべての応募作品を各審査員が目を通し、五段階評価をしたうえで、全審査員が審査委員会で意見を交わして受賞作を決定する、というプロセスを経る。五段階評価のAは最優秀賞、Bは優秀賞（二作まで）、Cは佳作（三作まで）で、ここまでの最大六作品が入選作となる。

今回、応募作品を一読して、佳作レベルに達している作品は六作を軽く超えているという印象を持った。さんざん悩んで六作に絞り込み、審査委員会に臨み、他の審査委員の先生方と忌憚なくディスカッションしてこの結果となった。

個人的には、応募者にはあまり「傾向と対策」を意識してもらいたくない、という思いはあるものの、審査委員長の佐藤先生が総評で書かれていたように、今回、設定がかぶっている作品が目立った。一つは、社会への適応に困難を感じている一人称の主人公の話。もう一つは、親しい人物が亡くなる話。前者はおそらく自分自身に近いので書きやすく、後者は逆に、物語を簡単にドラマティックにできるので使いやすいのではないかと。

筆者は「ありがち」な設定を否定する立場ではない。大事なのは、ありがちな設定をいかに上手に、可能な限り独自性を打ち出して扱うことだと考える。ただ、本賞のようなコンテストでは、審査委員の中に、設定がかぶった作品複数が入選を争った場合、その中から一つに絞りたい、というバイアスが働く、という事実は否定できない。筆者もそうだが、審査委員には入選作にできるだけバリエーションを持たせたいという意識がある。設定がかぶった場合、まずその中での競争に勝ち抜かないと入選するのは難しいという現実があることを応募者は心得られたい。

だからといって、突飛な設定にすればいいかといえば、そうでもない。小説の評価の基準の一つには「説得力」があると筆者は考える。現実らしさという意味での「リアリティ」とはちょっと異なり、SFやファンタジーなどわれわれの現実世界とは異なる世界を舞台にしても、小説としての確かな手ごたえや迫真性を感じさせる力、としておこう。設定を突飛なものにすると、この「説得力」のハードルは一般に高くなる。作品として高い評価を得るのも難しくなるということだ。

今回の応募作にも、SFやサスペンスに分類できる意欲的な作品があったが、このハードルゆえ、入選には及ばなかった。どんな設定や題材を選ぶかというのは作品を創る第一歩であり、こうした事情を考えると応募者には悩ましくもある問題だろう。そこにおそらく正解はない。筆者がこのようなことを書いたのはそれが言いたいからだ。応募者の皆さんには、

自分が一番書きたい、あるいは自信を持って書ける設定や題材を選んでほしい。

筆者は金沢大学で「文芸創作実践」という講義の小説の講師を担当させていただいている。入選作についての講評の前に、その講義でも参考にしている、小説の創作に役立つような本をいくつか紹介する（2024年10月時点で絶版になっていないものに限る）。

『「物語」のつくり方入門 7つのレッスン』円山夢久（雷鳥社）

『工学的ストーリー創作入門 売れる物語を書くために必要な6つの要素』ラリー・ブルックス著／シカ・マッケンジー訳（フィルムアート社）

『物語のつむぎ方入門 〈プロット〉をおもしろくする25の方法』エイミー・ジョーンズ著／駒田曜訳（創元社）

佳作『千円札破りたい』

「安心」を人生の最大の価値とする、絶対的に安定志向である高校生の「僕」が、一枚の千円札を破りたいという内心の衝動と葛藤する話。

シンプルだが訴求力のあるタイトルと、それと直結する葛藤の設定がいい。背伸びせず自らの内にある葛藤と対峙する姿勢も個人的に好感が持てる。葛藤から浮かび上がるテーマも切実さと普遍性を備え説得力がある。ほぼワンシチュエーションで、もう一人の自己ともいべき紙幣の「細菌学者」の肖像画との対話に終始するにもかかわらず、文章のセンス、自己や社会への考察の豊かさや同時代性、ユーモアによって読者を引き込む力がある。ツイストからの自己発見のくだりも上手く描けている。

ある意味「地味な」題材であり設定であるが、小説としての展開の仕方により他の応募作との差別化に成功した作品である。

佳作『沈丁花が枯れるとき』

現代の若者である「僕」が、前世で恋人同士だった若い女性「みつ」と山奥の廃村で再会し、前世の記憶を思い出す、という話。

文章はこなれておらず、日本語の用法もところどころ間違っている。肝心の設定で説明不足にもかかわらず、一人称での無駄な考察があったりする。シリアスな地の文と漫画的な会話文とが噛み合っていない。主要なキャラクターが「立って」いない。

個人的には小説としてのさまざまな欠点が目につく作品だったが、新海誠作品にも通じる感性だという高い評価もあり、入選という結果になった。

佳作『ファン・レター』

「僕」と遥香の幼馴染であった翔が亡くなり、残された二人が「変わっていた」翔を回想するという話（翔が亡くなっていることは小説のラストで明かされるが、本作は作品集には掲載されないのでネタバレをする）。

応募作の中でも完成度が高く、小説としても（無駄がないという意味で）洗練されている。翔という人物がしっかり造型されており、幼馴染である語り手と遥香を含む三者の関係も立体的に描くことに成功している。冒頭の文章の仕掛けと構成も見事。翔の死因は吉田修一の『横道世之介』と同じで、構造もそれに類似すると指摘することも可能だが、それは瑕疵にならないと判断した。

キャラの立て方や会話文にセンスを感じ、個人的には商業レベルに近い作品であるという点で高く評価した作品だったが、キャラクターの造型や設定に批判的な意見もあり、佳作となった。

優秀賞『夏時雨とゲオスミン』

行方不明になった兄について、兄の大学のバンド仲間である女性（ハルカ）と弟である「僕」が語り合い、「僕」は自分の知らなかった兄を知るという話。

よくできている。「等身大」ながらもクレバーな感性と描写。思春期の男子目線で（性的な要素はおそらく意図的に排除された）ハルカという人物も魅力的に造型されている。彼女の外面から内面を察する発見、彼女の知る兄と自分の知る兄がどちらも「正しい」という発見、それらがストーリーの中で自然に、的確な表現で語られてゆく。主人公の名前にもある雨のシンボルとしての使い方も上手い。

ただ個人的に、この作品には決定的な弱点があると感じた。主人公とハルカのハズであり、それぞれに自己発見を促す触媒である肝心の兄の人物が明確に像を結ばないのである。この点で、筆者は、同じようなモチーフと構造を持つ『ファン・レター』よりも低く評価していた。が、感性や文章力において、この作者は最優秀賞を獲ってもおかしくない力量の持ち主であるとも考えていた。

他の審査委員の先生方には本作の方が評価が高く、筆者も納得してこの結果となった。

優秀賞『タコと玉手箱』

愛知県の離島を舞台に、不登校児の小学生蒼佑と、もの作りの才能はあるが社会に溶け込めず兄が経営する学童保育で指導員をしている道徳（みちのり）との年の離れた友情と、二人の夢の顛末を描いた話。

題材、テーマ、キャラクターのアクチュアリティある独自性が群を抜いており、物語としての構成、豊かだが無駄のない語り口、臨場感ある描写力、的確なディティール、すべてが高いレベルで結晶している。孤独な二つの魂の触れ合い、年齢差を超えた真の友情、われわれを地上に縛りつける重力を振り切って遥か空の高みを目指す真ん中の力強いロマン。短い枚数の中でよくぞここまで描き切った。

何度も何度も推敲を重ね、どうにか規定枚数に収めようとしたことを、当初は改行していたところを詰めただろう痕跡がはからずも雄弁に物語っている。本賞の傾向と対策など考えず、作者は自分が一番情熱を持って書ける話を火力全開で書いたのだ。何とも頼もしい生

命力を感じさせる作者である。

筆者は個人的に高く評価していたが、他の審査委員からは批判的な意見もあった。むしろ、筆者の高評価を不思議に思っている先生の方が多かったように思う。それこそ、ある意味こてこての、ありがちな物語ではないかという指摘や、おそらくはモデルがあると思われる離島の設定に疑問を持つ声もあった。

そうした指摘も当たっているかもしれない。にもかかわらず筆者がこの作品を強く「推す」のは、作品に込められた作者の熱量を感じるのと、現実足をつけながら自らのロマンに忠実に創造されたキャラクターに、他の応募作にはないユニークさがあると思えたからだ。

この先どんな作品を書くのか、一番想像がつかないという点でも作者に魅力を感じた。作者にはぜひこれからも小説を書き続けてほしい。

最優秀賞作『スカートの方』

高校三年生になり、クラスの女子の中で孤立した「私」は、新調した際クリーニング店のリサイクルボックスに入れた自分の古いスカートを、クラスメイトの女子が穿いていることに気づき、彼女が申し込んだ一日看護師体験に自らも参加する。生と死の交錯するリアルな現場に立ち会った「私」の中に変化が生じる、という話。

てにをはの間違いや、こなれていない表現、思わず赤を入れたくなる箇所もあるが、同時に、はっとするような上手い描写や、迫真性のある表現も多く見られる。粗削りだが、力量やスケールを感じさせる書き手である。

一日看護師体験という題材は多分に優等生的であるが、描かれる葛藤は真に迫っており、自己発見は予定調和的ながらダイナミックで説得力を感じた。タイトルにもあるスカートを、作中でも人物を造型するシンボルとする使い方はやや強引ながら、そうしたたぐらみは評価できる。題材の力もあるが、鋭い観察眼や、現実や自己と切り結ぶ力強さは頭一つ抜けているのではないか。

審査委員多数の高評価もあり、この結果となった。